



今から3年前、教師生活で初めて中1の授業を担当する機会に恵まれました。それまでは高校生を受け持つことが多かったため、当初は新入生以上に緊張していたように思います。小学校の外国語活動で英語に触れているとはいえ、本格的な学習はこれからという生徒たちです。奇しくも、その年は平成24年度版のNEW CROWN (NC) が使用され始めた年。NCの持ち味を最大限に活かすことができるよう、同じく中1に関わる同僚と相談しながら、授業を進めていきました。

NCは「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を伸長させる活動が豊富です。特に、これらが有機的に結びついたMini-project (各学年3回の統合型活動) には、ある程度まとまった時間を割きたいと考えました。また、活動の成果をできる限り「目に見える形」で残すことも視野に入れました。以下はその年に作成した中1用シラバスの備考欄に記述したものの一部です。

- ・各学期に作品作りやプレゼンテーションの録画撮りなどの時間を設ける。
 - 1学期：自己紹介[カード作り・発表]
 - 2学期：友達紹介[ポスター作り・発表]
学校紹介[新聞作り・発表]
 - 3学期：自分史[エッセイ作り・発表]

10月に開催された文化祭では、上記の作品のうち、友達紹介のポスターを英語科の会場で展示しました。また、発表時に撮影した映像も、他学年のプレゼンテーションとともに、2日間に渡って放映しました。中1の生徒にとっては、普段聞くことのできない他クラスに所属する仲間、そして先輩の発表に接するよい機会となったのではないのでしょうか。

さて、作品を提出させたり、発表を録画したりすると、そこでその活動は「終了!」という気持ちになってしまいがちです。しかし、せっかく貴重な授業時間を費やして準備したので、定着を図る意味

でも、繰り返し利用したいものです。そこで、作品作りや発表で使用した原稿を自由英作文として、定期試験で再び書かせるということを試みました。

同じトピックでの自由英作文の出題は、賛否が分かれるところです。最大の弱点としては、あらかじめ覚えてきた文章を再生産する試験では、書く力を真に測ることはできないという点が挙げられます。一方、中1といえば、四線紙上での正書法に始まり、通常のノート使用へと自然に移行していく時期です。中には、何度も目にしている英文であるにもかかわらず、それを書くだけで精一杯という生徒がいます。そのような生徒には、時間をかけて練った自身の思いを答案用紙上で表現することにより、まとまりのある文章を書く喜びにもう一度触れてもらいたいと考えました。

もちろん、テストの流儀から外れた分は、その他のところで補います。例えば、「あなた自身について、英語で答えなさい」という指示の下、疑問文への応答を書かせたり、「下線部に自由に語句を入れて、文を完成させなさい」という問いを用意したりと、授業中の活動を応用させた新規の問題も設けるよう、心がけました。

上述したことは、勤務校が中高一貫校であったため、幸いにも6年間の見通しを立てることが可能であった点と関連しています。例えば、長年担当していた高2(一部)の定期試験では、初見のトピックで80語から100語の自由英作文を課していました。「数年後には中1の生徒もそこまで成長し得る」という体験を伴った実感が原稿を再利用するためらいを消したといえます。学校によって、制度や時間数、授業の様子などはさまざまです。だからこそ、英語教育の理論を学び、それを活用すると同時に、教師自身が日々肌で感じる生徒の実態も定期試験に反映させていくことが大切であるように思います。